

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 9日現在

機関番号：33501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：平成21年度 ～ 平成23年度

課題番号：21330204

研究課題名（和文） 対話による意味生成的な美術鑑賞教育の地域カリキュラム開発

研究課題名（英文） Area Curriculum Development of Art Appreciation Program through Meaningful Dialogue

研究代表者

上野 行一 (UENO KOICHI)

帝京科学大学・こども学部・教授

研究者番号：40284426

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、対話による意味生成的な美術鑑賞教育の地域カリキュラムおよび指導法を構築し、その成果を『北九州市美術鑑賞教育カリキュラム』ならびに『東京都府中市美術鑑賞教育カリキュラム』にまとめた。学校と美術館、地域が一体となって進める鑑賞教育の授業研究を、北九州市で31回、東京都府中市で17回それぞれ実施した。また美術鑑賞教育フォーラムを3回開催し、これらの成果を大学美術教育学会等で発表した。

研究成果の概要（英文）：Through this study, we built the area curriculum of art appreciation program through meaningful dialogue and instruction method and gathered up the result in "Kitakyuushuu-shi art appreciation education curriculum" and "Fuchuu-shi, Tokyo art appreciation education curriculum". We carried out a class study of the appreciation education an art museum and an area cooperated with a school, and to push forward 31 times in Kitakyuushuu-shi and carried out 17 times in Fuchuu-shi, Tokyo. In addition, we held three times of art viewing forums and announced these result in university art education societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2011年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
年度			
年度			
総計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：各教科の教育（図画工作・美術工芸）

1. 研究開始当初の背景

本研究の全体構想は、小・中学校9年間を見通した対話による意味生成的な美術鑑賞教育を開発することである。本研究では鑑賞教育の目的を、児童・生徒の美術作品等との出会いから、見る（触る、体感する）等の体験活動を通して美術への興味・関心や理解を促し、美術に対する自己の見方や感じ方、考

え方を形成することと捉えている。

小学校学習指導要領図画工作科ならびに中学校学習指導要領美術科において、美術館を利用、活用する学習が示されて久しいが、双方の共通理解や具体的な方法の構築等に課題があり、試行的な実践が単発的に見られるという背景があった。

本研究は学校と地域が連携した小・中学校

9年間のカリキュラムを開発するものであり、行政単位レベルでの地域カリキュラムを作成することから、各地におけるモデルとしての成果が期待される。

(1) 美術の作品や伝統、文化を主体的に味わう学習活動の開発

本研究では、美術作品はもとより、伝統や文化のもつ歴史的背景や意味、価値は教え込むものではなく、それを現代における学習者が発見したり、問題解決したりする能動的な性格を帯びたものと捉えている。とりわけ伝統や文化について学ぶことは過去を知るといよりも、その延長としての現在を知り、未来に向かってどのように活用するのかを学ぶ創造的な教育という視点が重要であると考えている。

学力観の問い直しや学習論再構築の動向の中、教師からの一方的な教授過程と学習者の受動的な学習過程による座学的な学習モデルから、教授—学習の過程が双方向的な、また学習者の能動的で相互的な学習モデルによる授業改革が各教科で進められているところである。

対話による意味生成的な美術鑑賞は、こうした研究の動向を背景にし、美術の作品や伝統、文化の意味を学習者全員で対話し意見交換しながら構成していく能動的で相互的な学習を構想するものである。

学習論の観点からすれば、学習行為を学習者が知識を構成していく過程、共同体の中での相互作用を通じて行われるものと捉える構成主義的な学習論による美術教育という性格を帯び、自律的な思考様式を育てる省察的な学習モデルによる美術文化に関する学習と位置づけることができる。

こうした研究は美術教育分野において先端的であり、本研究の学術的な特色・独創的な点である。

(2) 地域の特色ある美術の作品や伝統、文化に関する教材の選定と小・中学校9年間を見通したカリキュラム開発

地域の特色ある美術の作品や伝統、文化に関する教材を選定し、全国共通の教材とバランスよく配合したDVD教材や指導書の作成はこれまで例がなく、本研究の独創的な点である。

(3) 地域全体の密接な連携による教育実践の創出

本研究の目的である地域の美術文化の教材化（資料編集）やカリキュラムの作成、副読本作成等の一連の過程は、地域の教育委員会や教育研究組織、美術館や博物館、社寺等地域全体の協力を得ておこなう必要がある。このことは、本研究が図画工作科や美術科の教科教育固有の研究としてではなく、教育課程全体、学校全体の取り組みとなり、さらには地域全体の密接な連携による教育実践の

創造につながる大きな特色である。

2. 研究の目的

こうした全体構想をもとに本研究課題の目的を、義務教育期間を通しての対話による意味生成的な美術鑑賞教育のカリキュラム研究と、それを地域ごとに特化、具体化した教材開発・授業用資料の作成・授業研究を行うこととした。

本研究は、平成18年度から平成20年度の科学研究費補助金（基盤研究(B)）課題番号18330194)による研究課題「対話による意味生成的な美術鑑賞教育の開発」（以下、平成18-20年度科研）を継続し、発展させる研究である。

これは、平成20年1月の中教審答申、同3月の小学校図画工作科・中学校美術科の学習指導要領改訂において示された「自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなどの鑑賞の指導を重視する」という改善の基本方針を受けたものであり、また、平成18年12月の教育基本法の改正を受け、より明確に教育目標として示された「学校における伝統と文化に関する教育」も視野に入れた研究である。

明らかにしようとすること（究明課題）は次の通りである。

課題(1) 日本及び地域の特色ある美術の作品や伝統、文化に関する教材の選定

① 日本美術の作品や伝統、文化に関する内容を精選し、全国共通の教材として選定する。

② 都道府県・市町村等の地域ごとの特色ある内容を地域教材として選定する。

③ 教材の選定に際しては、地域の教育委員会や学校等の教育組織、作品を所蔵する美術館や博物館、社寺、保存会等からなる実行委員会を結成し、地域全体の協力を得て行う。

課題(2) カリキュラム開発と指導書の作成

① 小・中学校9年間を見通したカリキュラム開発を行う。図画工作科と美術科を中心に、他教科等との関連や児童・生徒の発達段階などを十分に考慮して行う。

② 授業研究の考察をもとにして、指導書を地域ごとに作成する。

課題(3) 作成した教材・指導書を活用した対話による意味生成的な授業の実践と検証

① カリキュラムに基づき、各地域において作成した授業資料を用いた対話による意味生成的な美術鑑賞の授業研究を実施する。授業研究校については、研究指定校やそれに準ずる学校に依頼する。

② 実施された授業について、授業分析・検討会を行う。

③ 研究成果についてシンポジウムを開催する。研究を実施した全地域からの報告をもとに、関連性、個別性の比較を行う。

3. 研究の方法

(1) 日本の美術の作品や伝統、文化に関する内容について地域ごとの特色ある内容を教材として選定する。

(2) 義務教育 9 年間を見通して小学校図画工作科と中学校美術科の連続的な地域カリキュラムを作成する。

(3) 作成したカリキュラムと指導書を用いて地域ごとに対話による意味生成的な授業研究を行い、全地域の結果を集約するとともに、地域ごとの関連性、個別性等の比較検討を行う。

4. 研究成果

研究の初年度である平成 21 年度は、高知大学を会場に、研究チームに協力者を交えた研究打ち合わせの会議を定期的に行った。また、国内各地域における研究活動の打ち合わせを行った。研究の目的で示した 3 つの究明課題のうち 21 年度は課題(1)に関して研究を行った。

具体的な内容、役割については次のとおりである。

- ・学校における美術鑑賞教育及び伝統と文化に関する先行研究を検討した(全員)

- ・地域ごとに特色ある内容を選定する。上野・三澤は教育学の観点から、奥村は教育政策の観点から、一條は美術史の観点から、それぞれ研究を行った。

- ・地域ごとの実行委員会を結成し、研究計画を立てる。研究地域は、複数の候補地の中から調査・考察の結果、最終的には福岡県北九州市、東京都府中市となった。

平成 22 年度は、東京都府中市ならびに福岡県北九州市において、21 年度からの継続研究を行った。実行委員会は府中市において 5 回、北九州市において 4 回行った。

選定の過程では、学習指導要領の文言に沿って作品を精査したが、発達段階ごとの教材(鑑賞作品)の特性がより明確になるとともに学習指導要領の理解の深化にも結び付くなど、実行委員会からはカリキュラム作成それ自体の教育効果も評価された。

府中市において授業実践が進められ、6月 26 日(土) 27 日(日)には、府中市美術館および生涯学習センターにて公開授業ならびに府中市カリキュラムの中間報告を行った。

後発の北九州市においては作品選定と指導案検討が行われ、2月 11 日(金) 12 日(土)には秋田大学にて北九州市カリキュラムの中間報告を行った。

海外の本科研の研究課題に関連する地域の文化遺産、美術作品の教育プログラムについて調査した。とりわけスペイン国バルセロナ市では、カタルーニャ美術館にて館長のマイテ・オカニャ女史およびダミア・マルティ

ネス館員(教育部門責任者)、市立民族学博物館にてドロルス館員(教育プログラム担当)にそれぞれ対応していただいた。教育理念、方法、内容について聞き取るとともに、実際の様子を調査することができ、カリキュラムの作成に大きな示唆を得た。

23 年度は、研究の目的で示した 3 つの究明課題のうち課題(2)ならびに(3)に関して研究をおこなう予定であったが、震災による予算執行の遅れのため課題(3)については授業実践・検証が遅れ未達となった。

課題(2)カリキュラム開発と指導書の作成
課題(3)作成した指導書を活用した対話による意味生成的な授業の実践と検証

課題(2)については北九州市立美術館の所蔵作品および府中市美術館の所蔵作品を用いたカリキュラム開発を行い、指導書を作成した。地域の美術館が所蔵する作品を用いた小・中学校 9 年間一貫の鑑賞教育のカリキュラム開発は全国で初めての試みであり、今回の成果が他の自治体に波及し、各地でこうしたカリキュラム開発が検討、実施されることが期待される。

カリキュラムをもとにした指導書の作成にあたっては、昨年度より継続して学習指導案の検討会議を行い、23 年 9 月までに授業を実施した。北九州市地域では 31 回 993 名の児童を対象に授業を行い、府中市地域でも 17 回の授業を行いそれぞれの結果を指導書にまとめた。

指導書は北九州市版、府中市版と 2 種作成し、それぞれ 3000 部印刷した。

これらの研究成果については、24 年 1 月 21・22 日に文部科学省講堂にて成果報告会(第 7 回美術鑑賞教育フォーラム)を開催し、発表と研究討議を行った。参加者はのべ 440 名であった。また作成した指導書は参加者に配布し、それぞれの地域におけるカリキュラム開発の資料として活用されることが期待される。

今後の課題として、開発したカリキュラムにそった小・中学校での教育計画作成、指導書を活用した授業実践等が課題として考えられる。また、教育課程が似ている韓国での地域カリキュラム開発についても着手しているので、今後推進していきたいところである。

以上の年度ごとの成果をまとめると次のようになる。

(1) 地域カリキュラムの作成

北九州市と東京都府中市において地域カリキュラムを作成した。教材とする作品は、それぞれの地域の美術館が所蔵する作品、街なかに設置されている作品、地域ゆかりの作家作品から精選した。地元でありながら学習

の対象となっていなかった作品が、教材として活用され、地域に生きる児童・生徒にとってかけがえのないものとなることが期待される。

また児童・生徒の発達段階ならびに作品の色や形等の造形的な特徴、主題の特徴などから作品を検討する過程で、学習指導要領に示された共通事項の理解がより深められたことも成果の一つである。

カリキュラムの作成にあたって、地域の小学校と中学校、教育委員会等の学校組織と美術館とが一体となった実行委員会を設置し、長期にわたって開発を行った。このことは、継続的で発展的な教育実践の基盤を形成するものである。

(2) 義務教育9年間の連続的なカリキュラムの作成

義務教育9年間を見通しての連続的な地域カリキュラムを作成したことは、これまで断続艇でありがちであった小学校図画工作科と中学校美術科の校種間連携をうながすものである。

(3) 指導書の作成

研究の成果を『北九州市美術鑑賞教育カリキュラム』ならびに『東京都府中市美術鑑賞教育カリキュラム』にまとめ、発刊した。具体的な指導案を提示することにより、実践の拡充が期待できる。カリキュラムは地域の教育組織、教育委員会、美術館の協力によって作成されたもので、このような方式でのカリキュラム作成の方法は、今後各地で参照され、全国で活用されることが期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

1. 「ジャクソン・ポロック展における「表現+鑑賞」連続授業のとりくみ」一條彰子、現代の眼、査読無、593巻 p. 11-12、2012、
2. 「図画工作科におけるこれからの学習評価～「報告」と「参考資料・参考事例集」の活用～」、奥村高明、教育美術 平成23年6月号第72巻第6号 (No. 828)、査読無、巻828号、p. 28-33、2011
3. 「図画工作科におけるこれからの学習評価～評価Q&Aと実践事例」、岡田京子、教育美術、査読無、829号、p. 28-31、2011
4. 「夏休み！こども美術館」—「鑑賞+表現」プログラムの位置づけ」、一條彰子、現代の眼、査読無、No. 591、p. 1-10、2011
5. 「自分を作る美術教育」、三澤一実、造形ジャーナル、査読無、No. 411、p. 10-11、2011
6. 「夏休みの教育普及活動」、一條彰子、現代の眼、査読無、583巻 p. 11-12、2010、
7. 「学校にアートプロジェクトは必要ない?」、三澤一実、教育美術、査読無、No. 822、

p. 28-29、2010

8. 「高学年の鑑賞活動における指導計画作成のポイント」、奥村高明、初等教育資料、査読無、866号、p. 50-51、2010

9. 「表現と鑑賞による意味生成と対話」、上野行一、広島大学、学校教育1109号、p. 6-11、2009、査読無

10. 「トークラリー—いまどきの中学生のための逆ギャラリートーク」、一條彰子、現代の眼、査読無、No. 579、p. 1-10、2009

11. 「対話による美術鑑賞」、上野行一、美育文化、査読無、Vol. 56. No5、p. 13-19、2008、

12. 「美術館におけるミュージアム・リテラシー」、一條彰子、日本ミュージアム・マネジメント学会、査読有、Vol14. No. 2、p. 13-15、2008

[学会発表] (計11件)

1. 「アート・プロジェクトを通じた大学と地域の連携～松戸中央公園におけるアートパークプロジェクトの実践と分析～」、奥村高明・大成哲雄、第50回 大学美術教育学会宮城大会、2011

2. 「造形活動における相互行為分析の視座 (3) 分析単位としての姿勢の変化と意味」、奥村高明、第45回 日本美術教育研究発表会 2011

3. 「子どもと見るアート—美術館を活用した鑑賞教育について」、一條彰子、せとうち美術館サミット、香川県立ミュージアム、2011

4. 「子どもたちの中の自由な美術」、上野行一、大分県教育委員会、大分県立芸術会館、2011

5. 「対話による美術鑑賞で育つ力」、長崎県教育委員会、長崎県立美術館、上野行一、2010

6. 「対話による美術鑑賞」、東京都教育委員会、相模原市桜台小学校、上野行一、2010

7. 「美術鑑賞カリキュラムの試案」、上野行一、第49回 大学美術教育学会「東京大会」、武蔵野美術大学、2010

8. 「ルーブル美術館における教育普及体制とクラス・ルーブル」、一條彰子、第49回 大学美術教育学会「東京大会」、武蔵野美術大学、2010

9. 「テート美術館の普及活動～日本の鑑賞教育との比較～」奥村高明、第49回 大学美術教育学会「東京大会」、武蔵野美術大学、2010

10. 「学校と美術館の連携に関する取組と問題点について」、一條彰子、群馬大学と群馬県教育委員会の連携プロジェクト、群馬県庁、2008

11. 「対話によって価値を創造する美術鑑賞」上野行一、鳥取県教育委員会、鳥取県教育センター、2009

[図書] (計15件)

1. 「イラスト&写真解説でよくわかる!わくわく小学校新図画工作授業 低学年編」、奥村高明、鈴木陽子、p. 1-112、2011
2. 「イラスト&写真解説でよくわかる!わくわく小学校新図画工作授業 中学年編」、奥村高明、鈴木陽子、p. 1-112、2011
3. 「アートポストカード集 vol. 2 (中学校～高校、大学、生涯学習用)」、奥村高明、西村徳行、美術出版サービスセンター、2011
4. 「評価規準を生かす授業づくり」奥村高明、岡田京子、ぎょうせい、p. 1-300、2011
5. 「私の中の自由な美術－鑑賞教育で育む力」、上野行一、光村図書出版株式会社、p. 1-176、2011
6. 「図画工作科研究」、岡田京子、藤江充、佐藤洋照、日本文教出版株式会社、p. 96-99、2011
7. 「評価のコツと指導要領・通知表記入のポイント」、岡田京子、小島宏 寺崎千秋、教育出版、55-58、2011
8. 「国立美術館アートカード・ガイド」、一條彰子、独立行政法人国立美術館、p. 1-48、2011
9. 「平成 22 年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修記録集」、一條彰子、独立行政法人国立美術館、p. 1-176、2011
10. 「新評価規準を生かす授業づくり」、奥村高明、岡田京子、ぎょうせい、p. 1-202、2011
11. 「対話による鑑賞教育－中学校美術教師のための実践ガイドブック－Vol. 2」、上野行一、光村図書出版株式会社、p. 1-28、2010
12. 「小学校新学習指導要領の授業 図画工作科実践事例集」、岡田京子、新野貴則、小学館、p. 42-47、2010
13. 「子どもの絵の見方～子どもの世界を鑑賞するまなざし～」、奥村高明、東洋館、p. 1-104、2010
14. 「美術教育の動向」、岡田京子、大坪圭輔、三澤一実、武蔵野美術大学出版社、p. 128-134、2009
15. 「平成 21 年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」一條彰子、独立行政法人国立美術館、p. 128、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野 行一 (UENO KOICHI)
 帝京科学大学・こども学部・教授
 研究者番号：40284426

(2) 研究分担者

奥村 高明 (OKUMURA TAKAAKI)
 聖徳大学・児童学部・教授
 研究者番号：80413904
 岡田京子 (OKADA KYOKO)
 国立教育政策研究所・教育課程センター教

育課程調査官

研究者番号：40615506
 三澤 一実 (MISAWA KAZUMI)
 武蔵野美術大学・造形学部・教授
 研究者番号：10348196
 一條彰子 (ICHIJYO AKIKO)
 独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・主任学芸員
 研究者番号：40321559

(3) 連携研究者

()

研究者番号：